

国立公文書館所蔵『大阪専門学校 大阪 第5の1冊』の第五文書は「日本大學専門學校校舍増築認可」に関する文書群である。当時の同校「設立者」の「山岡萬之助」より「文部大臣鳩山一郎」に宛てた昭和八年十月十九日付の「當校校舍増築」の認可の「御願」が出されており、「増築理由」は「既存校舍ニテハ狹隘ヲ感スルト同時ニ既存校舍ハ木造ナルヲ以テ不燃質ノ校舎ヲ必要トスルヲ以テナリ」とされる。

ここで刮目すべきは、次の様な内容の小野村胤敏先生からの「昭和八年拾月貳拾四日」付「寄附申込書(写)」が添附されている事である。それは、「金貳萬圓也」を「日本大學専門學校校舍建築資金」として「昭和九年ヨリ昭和拾貳年ニ於テ毎年金五千圓宛拂込寄附致候也」となつてある。

国立公文書館所蔵『大阪専門学校 大阪 第5の2冊』の第二文書は「大阪府経由 日本大學専門學校校舍増築認可」に関する文書群である。当時の同校「設立者」の「山岡萬之助」より「文部大臣 木戸幸二」に宛てた昭和十二年十一月四日付の「御願」が冒頭に有り、「今般當校校舍増築致度候ニ付キ御認可相成度別紙摘要書仕様書及圖面相添此段及御願候也」とされ、「増築理由」は「本校既存ノ木造平建大講堂及ヒ木造平建校舍各壹棟ハ昭和九年九月貳拾壹日ノ関西大暴風水害ニ於ケル被害建物ニシテ之力復興事業トシテ鐵筋コンクリート造ニヨル本増築ヲ必要トスルモノナリ(参考寫眞一葉添附)」とされている。そして、ここで注目に値するのは、左掲の如き「借入金明細」が添附されている事である。

以上から、小野村胤敏先生の専門學校への財政的貢献は、「日本大學専門學校校舍建築資金」として昭和八年拾月貳拾四日に申込まれたところの、昭和九年から昭和十二年までの毎年「五千圓」の合計「貳萬圓」の寄附であり、昭和十二年に同専門學校校舍増築の為の大坂府北河内郡交野村「交野無盡金融株式會社よりの借入金」「金五萬圓」の「擔保提供者」となつてゐる事である。

従つて、前者は小野村胤敏先生が同専門學校長代理に就任する前年に属し、後者は同校長に就任した翌々年に属するのであり、しかも後者は「関西大暴風水害」、即ち「室戸台風」で被害を蒙つた「日本大學専門學校校舍増築」の為の交野無盡金融株式會社からの借入に関する事であるが、この史料に掲げられる五萬圓は塚口氏の前掲論考等の挙げる金額三十萬円とは、文字通り桁違いの金額である。

このように「可信性(Glaubwürdigkeit)の高い一次史料を狩猟し、それらを歴史学の徹底した史料批判の範に通す事によつてのみ、歴史的事実の真正なる「認識」を得る事が出来るのは、今更贅言を重ねる必要もない。(近畿大学名誉教授 建学史料室研究員 荒木 康彦)

借 入 金 明 細	
一、金額	金五萬圓也
一、借主	大阪府北河内郡交野村 交野無盡金融株式會社
一、擔保物件	右借入金ノ擔保ハ左記擔保提供者カ右貸主會社 ニ預ケ居ル無盡積立金ヲ擔保トシテ借入ルルモノナリ。
擔保提供者	大阪市東区博勞町貳丁目六拾八番地 小野村胤敏
一、利息	百圓ニ付日歩金貳錢 毎月十日拂
一、利息支拂期	借入ノ日ヨリ向フ七ヶ年間に年賦又は月賦 (後略)

中央図書館調査報告①

中央図書館で、桑原玉市『大東亞皇化の理念』(發行所富士書店・配

①裏表紙見返しに「近畿大学図書館 寄贈 47.9.11 寄20425」の楕円形スタンプが、同遊び紙に「再受入 図書」のスタンプが押されている。背表紙の上部が少し欠損し、裏表紙は外れている。

②裏表紙見返しに「近畿大学図書館」の楕円形スタンプが押されていて、「46.3.5 寄16227」と書き込まれている。製本済みである。

③裏表紙見返しに「近畿大学図書館 46.3.27 104754」の楕円形スタンプが押されている。製本済みである。

給元 日本出版配給株式會社・昭和十七年六月十五日發行)なる図書三部を見出した。本書は著述部分一九四頁、國防科學研究協會輯錄による「感銘錄(拔粹)」二十八頁から成る。「皇紀二千六百二年二月二十五日」に「大阪郊外布施市假寓」に於いて著者が記した「ことわりがき」に従えば、同協会主催の「講演の稿本」に「多少の補訂」を施した著述部分に「感銘錄(拔粹)」が付されて、「國防科學研究協會より研究叢書第一輯」として刊行されたものである。CiNiiで検索すると、国内の他の大学図書館の八館で夫々一部ずつ所蔵されているが、複数の部数を所蔵する大学図書館はない。故に、本学中央図書館のみが本書を複数の部数所蔵している事が、先ず以て刮目に値する。この三部の夫々の、ここで注目される点は以下の通りである。

(1)が傷んでいるものの、本来の装丁・サイズである。又、(1)・(2)・(3)の来歴は、特に(2)・(3)の如きは製本済の為、不明である。だが、「弔文入図譜」や寄贈のスタンプがある事から、本書の発行年月日を勘案すれば、(1)・(2)・(3)は本学前身の専門學校に於いて何らかの形で所蔵或いは使用されたと推測される。

そして、本書に於いて最も注目されるのは、著者による「ことわりがき」の末尾に記載されている著者の肩書が「日本大學大阪高等學院校教授兼學監」となつてゐる点であり、そして巻頭に収録されている「皇風治東亞」という「題字」が「大阪師團長關原六中將」によるものである事も看過出来ない。

昭和十二年六月二十日に日本大學本部に皇道研究所が今泉貞助（一八六三—一九四四）を中心にして設置されたが、同年十一月廿日付『日本大學新聞』第二八六號に掲載された「辨令」の欄に「昭和十二年十月十八日 桑原玉市 日本大學皇道研究所主任に任ず」と認められる。日本大學では昭和十三年四月二十日に皇道學講座が開講されたが、これが昭和十四年二月二十日皇道學院と改称されており、桑原先生は本書の「ことわりがき」に有るが如く、この皇道學院でも教授も兼任していたという事であろう。

桑原玉市先生の前身の専門學校に於ける足跡は、次の二点が知られてゐる。

(1)昭和十二年の「生徒の同盟休校」解決の為に赴任し、解決後そのまま同校の学監に就任した事
 (2)昭和十九年の同校に於ける配属将校引き揚げに際し、軍部と同調した動きがあつた事
 本書の性格や「大阪師團長關原六中將」による「題字」からも、(1)の点は容易に推測できる。

桑原玉市先生の略歴に關しては、次の文献から、断片的な情報を得ることが出来た。

(a)『日本紳士録』第六十版（交詢社出版局 昭和四十五年）
 (b)『日本紳士録』第六十一版（交詢社出版局 昭和四十六年）
 (c)『人事興信録 上』第廿二版（人事興信所 昭和三十九年）
 (d)『人事興信録 上』第廿三版（人事興信所 昭和四十一年）
 (e)『現代物故者事典』総索引（昭和元年（平成二十三年）II 学術・文芸・芸術編』（日外アソシエーツ 平成二十六年）
 (f)I-(d)から判明した桑原玉市先生の略歴は、次の通りである。新潟県出身、明治三十三年十一月五日生まれ、昭和六年東京帝國大學経済學部経済學科卒業。更に、(c)-(d)によれば、昭和二九年福岡高專同三年福岡電波高校を夫々創設校長に就任同三年福岡電子工業短大同38年4月電波學園電子工大を各創設学長となる」とある。又、(c)-(e)によれば、読みは「くわばらたまいち」と分かる。本

そして、(e)によれば、「昭和57年12月

月16日」死没となつてゐる。このよう、中央図書館所蔵の図書の調査・考察を手掛りにして、本学の前身の専門學校の歴史を考察する上で、逸する事が出来ない存在としての桑原玉市先生を見出し、その略歴を把握し得た訳である。

(近畿大学名誉教授 建学史料室研究員 荒木 康彦)

中央図書館調査報告(2)

本学中央図書館に於ける調査で、校史関係史資料として価値のある次の四点を発見したので、その内容及び意義を報告する。

(1)小野村資文『小野村氏家譜並家計調査記録』（昭和五十二年 小野村資文発行）
 (2)『市制施行上申書』（大阪府中河内郡布施町・長瀬村・小阪村町・楠根町・意岐部村・彌刀村）（昭和十二年 清水謄写堂印刷）
 (3)『六ヶ町村合併市制施行記念誌』（布施町・長瀬村・小阪村町・楠根町・意岐部村・彌刀村）（昭和十三年 清水謄写堂印刷）
 (4)『布施町誌 繽編』（布施町誌編纂會發行 昭和十二年）

(1)は縦約二十六センチ・横約十八・五センチで、三一〇頁から成るもので、整理番号は「288.3・067」であり、裏表紙の見返しに「近畿大

書のうち第一〇一号」（一〇一は手書き）と記されている。小野村資文先生からの寄贈と判断される。関西大学校友会新聞『関大』二二八一三〇号に掲載された塙口義信「関大を彩る人々 小野村胤敏（上）・（中）・（下）」が転載されている。小野村家の歴代の方々に関する史料も採録され、特に小野村胤信の履歴書は小野村胤敏先生の伝記史料としても重要である。

(2)は縦約二十七・五センチ・横約十九・五センチで、三八二丁から成るものがオリジナルの厚紙の表表紙・裏表紙付で製本されており、整理番号は「3181・Sh89」であり、裏表紙の見返しに「近畿大学図書館 諸 49. 3. 15 寄23648」の精円形のスタンプが有る。標記の六ヶ町村が内務大臣に提出した『市制施行上申書』の「副」でないかと推測される。当該六ヶ町村のあらゆる分野の統計数字が整理されて提示されており、当時に於ける当該各町村の政治・社会・経済の動向が具体的に把握出来る。就中「日本大學大阪専門學校」の具体的調査記録（昭和十一年四月一日現在）は非常に史料価値が高い。

(3)は縦約二十七センチ・横約十九・五センチで、四五三丁から成るものが製本されており、整理番号は「318263・R63」であり、裏表紙の見返しに「近畿大学図書館 52.4.12 寄30580」の精円形のスタンプが押されてゐる。本文は私家版であり、奥付に「二〇〇〇年五月二十四日 寄41374」の精円形のスタンプが押されている。(2)に立脚して編

まれた『記念誌』である為に「日本大學大阪専門學校」・「日本大學大阪中學校」に就いての同様な調査記録が収録されている。

(4)は縦約二十二・五センチ・横約十六センチで、二九一页から成るもので、扉に「近畿大学図書館」とのスタンプ・「近畿大学図書館図書」の角印と並んで「黒字 12.9.7 日大 墓」の裏面に「近畿大学図書館 42.10.23」の楕円形スタンプが押されており、その中に「番7904」の書き込みがある。この(4)では(3)に挙げられており、その中に「番7904」の書き込みがある。

各地のアーカイブズ紹介 9

—追手門学院大学
学院志研究室—

教職教育部教授

建学史料室研究員 富岡 勝

平成三十年三月五日、追手門学院大学の学院志研究室を聞き取り調査のために訪問し、学院志研究室の藤吉圭二室長、齊藤一誠副室長、安田純也氏、小倉久美子氏と将軍山会館の梅村修館長からお話を聞くことができたので、その概要を紹介したい。調査は、本学建学史料室研究員の酒勾康裕、同室職員木村道子と報告者の三人が担当した。

周年行事にかかる年表作成
藤吉室長に挨拶したあと、学院

れているような統計数字に立脚した叙述がなされているが、残念な事に「日本大學大阪専門學校」・「日本大學大阪中學校」に就いての記述はない。「黒字 12.9.7 日大 墓」のスタンプは、従来の調査では出てこなかつたスタンプであり、注目される。一連の蔵書印から、本書が日本大學専門學校庶務から大阪理工科大學を経て「近畿大学蔵書」・「近畿大學図書館図書」となつた事が分る。

(近畿大学名譽教授 建学史料室研究員 荒木 康彦)
の「一三〇周年（二〇一八年）が創立作成したが、まとめる際に、「改革の十年」と呼ばれる近年の追手門学院大学の改革の取り組みを焦点を当てて編集するという方針をとったといふ。その際、改革の取り組みを掲載した『学院報リベルタス』（学校法人追手門学院総務室広報課発行）を活用することによって、詳しい内容を漏れなく集めることができるよう心掛けたということであった。

また、一三〇年間分の年表データベースである「マザーレン」の作成に従事している安田氏からも作業内容についてお聞きした。これまで学院全体で刊行してきた十七種類の年表（学院全体・小学校・中学・高等学

校・大学など）の年表をもとに、統一した基準を設けて事項を収録しているとのことであつた。さらに、データベースソフトを活用して、年表事項と各年史の本文とをデータ上でリンクさせる仕組みを構築する試みもおこなつてゐるようである。

年表に関するこうした取り組みは、現在の周年事業だけでなく、将来の年史編纂でも活用していくことを目的に実施しているとのことであつた。正確で詳細な年表を作成していくことは、現在の周年事業はもちろん、将来の年史編纂についても大いに役立つ重要な基礎作業であるといえるだろう。本学でも参考にしたい取り組みであると思われた。

将軍山会館の見学

次に、同窓会館である将軍山会館



学院志研究室内での聞き取り調査の様子



将軍山会館外観

を見学し、梅村館長に解説していただいた。

将軍山会館は、学院二二〇周年、大学四〇周年の記念事業として、同窓会の寄付によって建設された施設であるとのことである。地上二階地下一階で建築面積約三七九平方メートル、延べ床面積約六八四平方メートルの広さで、一階と二階には学院の歴史に関する展示室が四室、地下には会議室や収蔵庫があり、さらにオープンカフェ、ラウンジ、中庭なども設けられている。一度に三十人程度の学生が同時にゆとりをもつて見学できるとのことである。たしかにゆつたりとした空間であった。

追手門学院大学では、自校教育の授業が行われており、受講生は、この授業の初回とともに最終回の授業にも見学している。二度目の見学で